

奨励賞

【家庭科】

持続可能な社会の構築を目指す 「サルベージ・パーティ®」の 実践

岡山大学教育学部附属中学校

かわかみ さちこ
川上 祥子

実践の概要

次第に減少しつつある日本の食品ロス量ではあるが、目標達成に向けた削減への取り組みは、さらなる努力が必要な状況である。

この食品ロスという社会問題に、「家庭科」からどんなアプローチができるのかを模索するなかで、食の無駄をなくすことの大切さと食材の組み合わせやネーミング等に創意工夫をすることの楽しさを実感できる「サルベージ・パーティ®」（「一般社団法人 フードサルベージ」による、「フードサルベージ（食材を救う）」という考え方に沿った取り組み）を進めた。食生活領域の学習におけるパフォーマンス課題として考えさせ、授業だけでなく長期休暇中の家庭での取り組みにもした。授業中の様子や提出されたレポート、振り

返りアンケート、その後の取り組みから、成果を検証した。

論文内容の紹介

1 | 研究の目的

食生活領域の学習のまとめりにおいて、「サルベージ・パーティ®をしよう」をパフォーマンス課題とすることで、本質的な問いである「よりよい食生活を送るためにはどうしたらよいのか」の理解に有効であり、本校家庭科研究室が目指す「持続可能な社会の構築の視点で意思決定できる生徒の育成」にも有効であることを明らかにすることを目的とした。

2 | 授業の実践

(1) パフォーマンス課題の提示

2年生の後期、食生活領域の学習後に「私たちが目指す持続可能な社会のためのよりよい食生活とはどのようなものだろうか」をテーマに考えさせたいと思った。この問いの理解を得るために、「サルベージ・パーティ®」に取り組みさせた。（「サルベージ・パーティ®」は、「一般社団法人 フードサルベージ」の登録商標）

●課題

本来は、家庭にある食材が「材料」となるべきだが、成果を共有できる課題にしたいと考え、

今週末、いとこ（中2女子）と一緒に、近くに住む祖母の家で Salvage party をしようと思います。それぞれが家に余っている食材を持ち寄ったら、以下の食材が集まりました。

リンゴ	2こ	しめじ	1袋	柿（たまご）	2こ	ツナ缶	2缶
切りもち	5こ	さつまいも	1本	ゆであずき缶	2缶	切り干し大根	1袋
小松菜	2株	キャベツ	1/4こ	千切りキャベツ	1袋	うどん（乾麺）	1袋
パプリカ	1こ	エノキダケ	1袋	エリンギ	1パック	()	

これらの食材を出るだけ使って料理を3品以上作りましょう。調味料（塩、砂糖、酢、醤油、味噌、マヨネーズなど）は自由に使ってください。

作った（作ろうと思う）料理はレポートにまとめましょう。レポートには料理名、材料・分量、簡単な作り方を分かりやすく記入し、盛り付け・配膳図をイラストや写真などを用いるなどして、工夫をまとめましょう。

共通の食材を提案した。この食材は、「おうちごはん OUCHI GOHAN」のホームページを参考にした。こちらが提示した食品には、2群(カルシウム)の食品が含まれていなかったため、何か一つ食材を追加するように指示した。

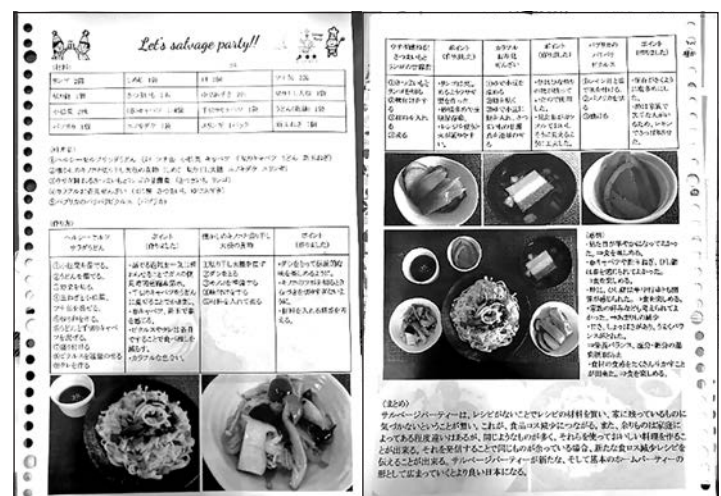
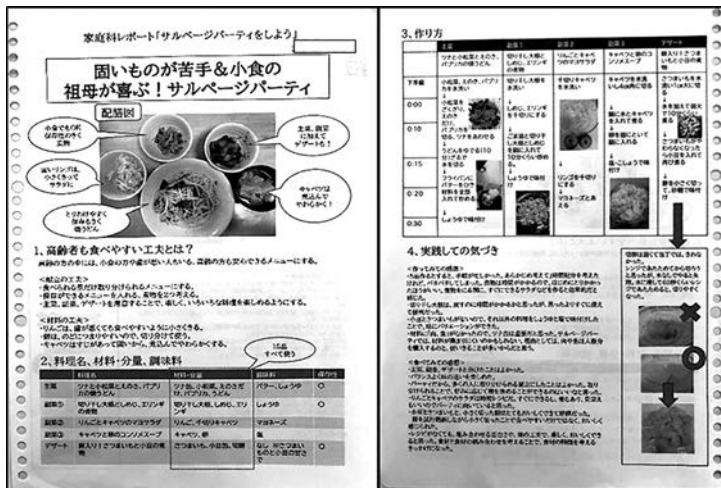
(2) レポート発表会

長期休暇後のレポート発表会では、「皮まで使う」「皿の数を減らす」といった、材料や資源を無駄なく使いきるといった環境の視点のほか、「味の濃さ、調理法など高齢者のことを考えて」「主食・主菜・副菜をを考えて」「食べ残しがないようにバイキング形式で」「和食や伝統料理をできるだけ取り入れて」「彩りや盛り付け方を考えて」「和

洋折衷を考えると」など、多様な視点で考えながら、献立作成ができた。

3 成果と課題

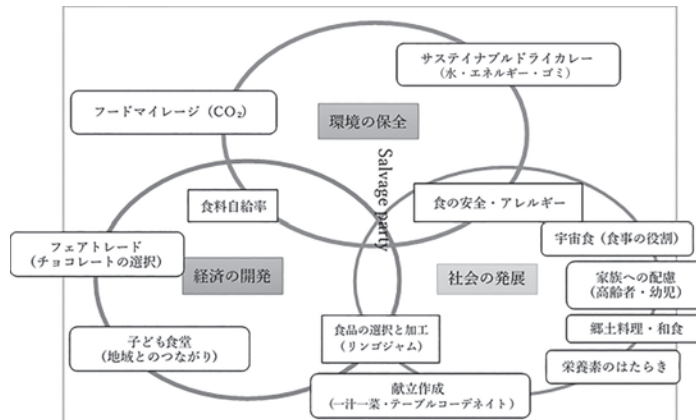
作品より、持続可能な社会の構築のための3側面のうち、環境面のみならず、社会・経済の面に配慮しながら、食生活をデザインしていこうとする生徒の様子がみられた。よって、サルベージ・パーティ®の取り組みは、「よりよい食生活を送るためにはどうしたらよいか」の理解と「持続可能な社会の構築の視点で意思決定できる生徒の育成」にも有効であった。学習後のアンケート結果によると、この取り組みを再度実施した生



徒は46%で、そのほとんどが家族と共に実施しており、食品ロス削減への取り組みが家庭で共有でき、実生活でも活かされたことがわかった。

「サルベージ・パーティ®」は、持続可能な社会のための多様な側面に配慮しつつも、今の食生

活を楽しみながらアクションできるものである。この取り組みを通して、生徒たちが食生活に限らず、実生活全般において、持続可能な社会の構築の視点で意思決定できるようになることを期待している。



奨励賞

【特別活動】

多様な性 ～あなたのままで大丈夫～

愛知県豊橋市立豊城中学校

きどころ みわ
城所 美和

実践の概要

制服のスカートに抵抗があり体操服で登校する子どもや、性についての悩みで保健室に相談に来る子どもがいる。文部科学省は、教職員向けに性同一性障害の資料を作成し、正しい知識で子どもに関わることを求めている。

実践の全体構想として、教職員には多様な性についての研修を行い、授業で扱うことにした。また、教職員と子どもそれぞれに、事前と事後にアンケート調査を行い、意識の変容を見ることにした。

これらの取り組みの結果、「自分らしく過ごせる学校にする必要がある」という教職員の意識が高まり、「私ができることは、誰もが認められていると感じられる環境づくり」と考える子どもの姿を見ることができた。

論文内容の紹介

1 研究の構想

実践を行うにあたり、二つの仮説を設定した。
【仮説1】多様な性に関する教員研修を行うことで、正しい知識が備わり、子どもへの適切な関わりができるようになるであろう。

【仮説2】多様な性の問題意識がもてる単元を構

想すれば、誰もが過ごしやすい学校生活を考え、行動する子どもが育つであろう。

そして、「男らしい」は褒め言葉と考えているA教諭と、多様な性を理解したいと考えるB子を選び、変容を追うことにした。

2 | 研究の実際

1 教職員に対して

教職員への研修は、①知りたいこと等を教職員向け通信として、週に2回、8週間発行する。②子どもに行う多様な性の授業実践を参観してもらい、研究協議を行う、この二つによって、意識の深化を図った。

2 子どもに対して（5時間単元）

(1) 意識を掘り起こす

多様な性への理解を生活の中で醸成させるため、①出入りに6色のALLYキーホルダーを設置、②多様な性の書籍を配架、③多様な性の資料を掲載、④出入りを常に開放し、保健室環境を変えた結果、興味をもつ子どもが増えた。

(2) 教材と出合わせる

小学校時代のランドセルを思い出させ、様々な色があったことと教師の小学校時代の赤と黒だけのランドセル写真を比較させた。

(3) 問いを生む

自分らしくが大事だと思いながらも、「女らしく」「男らしく」という言葉に振り回されているという意識が明らかとなったところで、カミングアウトした当事者のDVDを視聴した。

(4) 追究を保障する

各自の問題意識が大きく五つのカテゴリーに分かれるなか、当事者を招き、直接話を聞く場を設けることで問題解決の一つの方法とした。

(5) 核心に迫る

B子は「誰に対しても差別せず、自分らしく生きることが大切」と授業を振り返った。A教諭は「男らしさ、女らしさという言葉に違和感が出てきた」と話してくれた。

3 | 研究のまとめ

1 アンケート調査の結果

「LGBTQの人の割合を知っている」が19.0%から85.7%（教職員）、「偏見がなくなる社会にしたいと思う」が76.3%から84.4%（子ども）等、全ての設問で知識の量が増え、意識の高まりが見られた。

2 考察

二つの仮説と手立てによって、教職員も子どもも意識の変容が見られ、手立ての有効性が検証された。今後も子どもたちに、自分らしさを大事にすることを伝えていきたい。